JO

第33号　2020.10.20発行
発行者：株式会社協進印刷
編集者：JO編集委員会

地域をコーディネーションする魅力を多くの人に伝えたい

社会福祉法人若竹大寿会
横浜市六角橋地域ケアプラザ　地域活動交流コーディネーター　原島　隆行さん

平成23年日本社会事業大学社会福祉学部福祉援助学科卒業後、社会福祉法人若竹大寿会に入社。特別養護老人ホームわかたけ青葉で3年間介護職員として従事し、平成26年横浜市六角橋地域ケアプラザの職員として、誰もが住みやすいまちを目指し活動するコーディネーターに異動（現在6年目）。学生と地縁団体（自治会・商店街等）を結ぶ「まち×学生プロジェクト」をきっかけに、「オレンジプロジェクト」「キャンドルナイト」「まちSHOKU」等、地域と学生をつなぐまちづくりの最前線で活動をする一方、企業とタッグを組んでの「地域カフェ」の立ちあげや近隣保育園との協働で子育て支援事業を展開している。https://rokkakubashi-cp.wakatake.net/

江森：2016年から横浜市神奈川区の六角橋地区で始まった認知症の啓発を目的とした「オレンジプロジェクト」は、神奈川区独自の「見守り協力店」制度の創設につながるなど、大きな広がりを見せています。当社も第1回から協力・参加させていただいていますが、原島さんはまさにその仕掛人。どうしてこのような活動を始めたのですか。

原島：この場所は「地域ケアプラザ」といって、介護保険法によって位置付けられている地域包括支援センターに、福祉保健活動の拠点としての機能をプラスした横浜市独自の施設で、指定管理者制度のもと運営されています。私はその中の「地域活動交流コーディネーター」という、これまた横浜市の条例で定められている担当地域に住む0歳から百歳までの人たちを幅広くサポートするという仕事をしています。

江森：0歳から百歳までですか。それはまた活動の範囲が途方も無いですね。

原島：私が来たときはここができて3年目だったんですけど、何の施設なのわからないという方も多く、とにかく知っていただくことからのスタートでした。六角橋という地域は六角橋商店街と神奈川大学があって、横浜の中でもリソースが豊富な場所なので、それらをつなげるというのが目標でしたが、何しろ知っている人がいないので、最初の頃は学生が集まりそうなところに、Tシャツ短パンでふらっと出かけていって、おもしろそうな活動している学生を見つけては声をかけるというようなことをやっていましたね。

江森：あやしい～（笑）。でも学生を知るにはそれが一番。

原島：そうなんです。それでわかったのが、地域住民と学生の接点が少ないということだったんです。接点が少ないことで、学生に対する困りごとが大学を通じて学生に届けられることはあっても、地域から学生への感謝や好意的な意見は伝わりにくい。実際に「若い世代がたくさんいるお陰で防犯上もいい」「学生が日中もたくさん歩いていて町に活気が出る」などの意見もたくさん聞こえてきたんです。だけどそういう意見を交換する場がないんですね。じゃあ一回集まってみましょうかということで、集まったところから生まれたのが「まち×学生プロジェクト」だったんです。

江森：なるほど～、それで「まち×学生プロジェクト」をベースに認知症啓発に取り組んだのが「オレンジプロジェクト」ってわけですね。やっとつながりました（笑）。

原島さんがまちづくりにとても熱い思いを持っていることはわかりましたが、どういう経緯でこの仕事に？

原島：大学を卒業していまの社会福祉法人に入社して、3年間介護施設で介護の仕事をしていたのですが、人事異動で7年前に六角橋地域ケアプラザに配属されて地域活動交流コーディネーターになりました。

江森：子供の頃から福祉の仕事をしようと思っていたのですか。

原島：いや全然そんなんじゃなくて、僕たちが学生の頃は就職が厳しい時期で、何か手に職つけた方がいいだろうということで経済とかでなく、社会福祉の方面に進みました。物心つく頃にはバブル崩壊もあり、そういう星の下に生まれているのかもしれないです（笑）。で、勉強してみたら全然勉強に身が入らなくて、すぐに就職するのに迷いがあって1年間バックパッカーやったんです。ちょうど東日本大震災のときだったんですけど、アメリカを旅していて、地下鉄に乗っていたら募金箱のようなものを

持って乗客を一人ずつまわっている人がいて、そのときはその人が何をしているかわからなくて、他の人も結構払ってるし僕も払わなきゃいけないんだと思ってお金を出したんですね。そうしたら相手の人が珍しがって話しかけて来て、「お前何人だ？」って訊くから「日本人」と答えたら、「いま日本は大変じゃないか。そんなときに俺に恵んでくれるのか。お前の方が大変だからこれ全部やる」といって彼が集めたお金を全部くれたんです！周りの人にまで「みんなで助けようぜ」と声をかけて結構たくさんお金をもらっちゃうという経験をしました。そのとき自分の中で何かが変わったというか、ああ福祉とか助け合いというのは大切なんだなと思えるようになって、次の年に社会福祉法人に就職しました。

江森：そうでしたか。福祉業界の方には答えにくい質問かもしれませんが、私は現在の介護保険制度には大いに問題があると思っています。たとえば利用者にとって不要で不満足なサービスだったとしても、保険が適用されて個人負担が少額だからなんとなく惰性で消費してしまうということが起こります。施設側も利用者のニーズに応えるべく努力や工夫をしなくなる。その結果サービスの質の低下と、画一化が起き、ひいては生産性の低下を引き起こします。なんでもかんでも介護保険でやろうとすることに問題があるのではないか、民間でできることは民間でやるべきなのではないかと思います。地域活動交流コーディネーターとしてもいろいろと言いたいことがあるのではないかと思いますが、現場の感覚としてはどうですか。

原島：本当に答えにくい質問ですね（笑）。でもたぶんその壁には内部でもぶつかっているところだと思います。

昨年協進印刷さんにもご協力いただいた「地域カフェMAP」も、私の立場からすると地域カフェを運営している皆さんの活動を応援したい、地域活動に関心をもってくださる方を増やしたい、との思いから制作したものですが、一方では介護保険サービスではないところで、地域の高齢者が気軽に利用できる場を紹介するという役割も担っていると感じています。まちの中で、高齢者ご本人がご自身の意向で選択できる居場所の選択肢が少ないということは、江森さんがおっしゃるように大きな課題だと思います。

江森：こういう大きな制度があるとどうしても制度からものを見てしまいますからね。本来ケアの対象となる人がどういうニーズを持っているのか、人を中心に考えていくことが大事なんだと思いますね。

原島：最近は財源自体が厳しくなってきているので、必ずしも介護保険ありきではなくなってきていて、今後地域の負担が増えてくることが予想されています。そういう中で高齢者の見守りができるまちを作っていくには、やはり企業の支えなくしては成り立たないと思います。

江森：そうやって役所の人も言うんだけど、こちらからしてみると全然情報が出てこないから手の出しようがないんだよね。今まで消費者だった人たちが主体的に消費ができなくなったときに、全部介護保険で丸抱えしちゃうから、企業や商店から高齢者が見えなくなってしまう。それじゃ新しいビジネスも生まれようがないし、やろうと思ったら自分も介護保険の世界に入らなきゃできないというのはフェアじゃないよね。壁はあってもいいから、せめて透明にしろと言いたい。

原島：そこは課題ですね。公助から共助へと福祉も変革がなされている中、従来のやり方や価値観にとらわれず、福祉の分野でもまちづくりでも地元企業など民間の力と組むことが今後一層必要になると感じています。そういう意味でも、多様な主体（団体）が従来からある壁を乗り越え、連携して取り組むことが〝当たり前〟の世の中になってほしいですね。

江森：その点では「まち×学生」は見事に壁を壊しましたが、なんでうまくいったと思いますか。

原島：う～ん、いろいろな条件がたまたま揃って、恵まれてたということに尽きると思いますが、最後は「あの人の話なら聞くよ」という〝人のつながり〟が地域を動かす原動力になったと思います。それと立場の違う人たちをうまくコーディネーションできたということもあると思います。伝統を守って継続性を大切にする地域と、大学時代の一瞬を全力で燃えたいという学生とは時間軸にずれがありますので、両者の利害を平坦にならす役割が必要で、そこを地域交流コーディネーターという立場でできたことは大きかったかなと思います。

江森：企業と行政や、企業と学校などでもそうだけど、異なるセクター間の連携の場合、間に入ってくれる調整役は必ず必要になりますね。

原島：単なるポジションではなく、機能しているということが大事ですね。でもコーディネーターは黒子なので、最終的に世に出るときに存在が見えないんですよ。主体となった団体がクローズアップされるので、それだけを真似して失敗するケースは多いと思います。また社会的に認められていないので職業にするのも難しく、なかなか数が増えないというジレンマがあります。

江森：それには原島さんの活動を世間に知らせていく必要がありますね。名前だけのコーディネーターではなく、本当にコーディネーションできる人をどれだけ作れるかということが、地域が豊かになるかどうかの決め手になりそうですね。

原島：本当にその通りですね。町内会と関わっていて、担い手の高齢化とともに今後町内会活動も難しくなってくると感じるところもありますので、町内会×企業のような新しいノウハウを作っていくとともに、地域コーディネーションの魅力を多くの人に伝えていきたいです。

「ありがトゥナイト2020」今年はリアル＆オンラインで開催

7回目を迎える協進印刷CSR報告会「ありがトゥナイト2020」。今年は新型コロナウイルス感染防止の懸念から、これまでのスタイルを変更し、来たる11月20日（金）リアル＆オンラインで開催することになりました。

リアル開催の会場は例年と同じみなとみらいランドマークプラザドックヤードガーデンの「Bukatsudo」。感染予防策を徹底し、14時～16時30分にパネル＆作品展示を行います。もちろんスタッフは常駐しておりますので、お気軽にお越しいただき、ご意見やご感想などいただけたらたいへんうれしく思います。

そして、15時より同会場からの生中継でZoomを使ったオンライン報告会を開催。社長はじめ各担当者から昨年末から今年にかけての取り組みについて報告させていただき、オンライン参加の皆さまからもご意見やご質問をいただきながら、コロナのこと、これからの社会のことなど語り合う時間にしていきたいと考えています。

これまでなかなかご参加いただけなかった方の中にはオンラインなら参加できるという方もいらっしゃると思いますし、新しい形の「ありがトゥナイト」にぜひご期待いただきたいと思います。

例年ご参加いただいている方々には、気分も新たにリニューアルした招待状を送付させていただきますが、この記事を読んで参加してくださるという方は下記の「ありがトゥナイト2020」参加申込専用ページよりご登録お願いします。

晩秋の一日、企業、NPO、行政、学校などの垣根を越えて、地域のことやCSRについて考える機会となるよう、スタッフ一同準備を進めておりますので、多くの皆さまのご参加をお待ちしております。

ありがトゥナイト 2020 参加申込専用ページ
http:kyoshin-print.co.jp/tonight2020/

益者三樂　損者三樂

料理にまつわるエトセトラ

江森克治

「暑さ寒さも彼岸まで」とは本当によく言ったもので、この法則だけは地球が温暖化しても変わらないようである。旧暦時代も彼岸の中日は春分と秋分だったそうなので、カレンダーの日付に関係なく、昔からお彼岸が来ると暑さも寒さも一段落というわけ。ちなみに桜など春の花が温度変化で開花するのに対し、秋の花は日照時間に反応して開花するため開花時期の変動が少ないとか。気温の変化に加え10月に入ると待ってましたとばかりに金木犀が香り出すことも、季節の移ろいを一層強く感じさせる一因かもしれない。

涼しくなると恋しくなる野菜といえば「大根」。夏と冬で大根の味が違うのは気温のせいではなく品種が違うから。秋冬大根用の品種はお盆過ぎ頃から種まきが始まり、収穫されて店頭に並び始めるのが10月初旬というわけで、これからは煮るほどに美味しい秋冬大根の季節。

夏はせいぜいサラダにするか大根おろしにするぐらいなので、半切りのを買ってちまちま使う程度だが、この時期からはおでんでも煮ようものなら1本ぐらいあっという間。そこで本領発揮するのが、明治41年創業の老舗刃物メーカー貝印の「関孫六 縦型ロングピーラー」である。

近所のホームセンターで「大根専用！」と大書してあるパッケージを見つけ、これは聞き捨てならぬと即購入。以来かれこれ7、8年になるがもはや手放せない逸品。もちろん大根以外にも使え、「剥く」ことに関しては一切のストレスを感じさせない切れ味と使い心地。

と、ここまで盛り上げておきながら紹介する料理がふろふき大根ではないというのは、我ながら後ろめたさがないわけではないが、この「大根麺の坦々スープ」もとってもおいしい。長めの大根の千切りと豚ひき肉をごま油で炒め、味噌、醤油、豆板醤でかなり濃いめに味付け。そこに水、練りごま、鶏がらスープを加えて煮立て、長ねぎとしょうがのみじん切りを乗せて出来上がり。四川山椒を加えてシビ辛にしても◎。

あなたの知らないふぉんとのはなし

第三話　明朝体

おそらく日本で最も有名な書体「明朝体」。印刷にそれほど馴染みのない方でもWordについてくる「MS明朝」はご存知のことと思います。「みんちょうたい」と読むこの書体、もちろん「明日の朝」という意味ではなく、京都萬福寺の住職鉄眼禅師が1681年に彫り上げた明朝体の原型と言われる「鉄眼版一切経」が、明の国の経典の復刻版だったところから、そう呼ばれるようになったようです。ちなみにこの「鉄眼版一切経」は20字×20行で彫られており、現代の原稿用紙はこれに倣ったものとも言われています。

明治以降最もポピュラーな活字書体として普及していった明朝体ですが、「鉄眼版一切経」が隷書で書かれた経典を元にしていたことや、明治期に輸入された活字が中国の漢字辞典である「康熙字典」を参照していたことなどから、当時の日本人が一般的に書いていた筆記体（楷書体）と字体・字形が異なるという問題が発生しました。この字体・字形問題についてはぜひ前号をご覧ください。

日本には数多のフォントメーカーがあり、明朝体も各社各様、微妙な違いとはいえ実に多くのデザインがあります。最近Windowsで初期設定されている「游明朝」は可読性が高く、数字やアルファベットのバランスも良く〝神フォント〟の異名をとるほど評判です。時代と共にフォントにも流行があり、数年前まで文字が大きく見える「小塚明朝」などがよく使われましたが、最近では大日本印刷の前身である秀英舎が開発した「秀英明朝」などレトロな雰囲気のデザインが注目の的。モリサワの「A1明朝」のように「にじみ」によってレトロ感を演出するフォントも登場するなどまさに百花繚乱です。あなたもお気に入りの明朝体を見つけてみてはいかがですか。

日々新たなり
日々新たなり
日々新たなり
日々新たなり
日々新たなり

A1 明朝　筑紫明朝　秀英明朝　小塚明朝　游明朝

Kyoshin TODAY

コロナでも来てくれてありがとう！インターンシップ実施

例年であればこの時期までには10名程度の職業体験やインターンシップ生が来ていましたが、新型コロナウイルスの影響で今年は1名の受入れに留まっています。ここ数年、夏の恒例行事になっている市内公立高校への出前授業に参加した生徒がインターンに来てくれました。毎年先生方から「生徒のためにも厳しくやってください」とリクエストをいただき、5日間という短い期間で成長してもらうために「高校生だから」という見方はせず、ひとりの社会人として接します。その効果かどうかは分かりませんが、弊社にインターンシップに来た生徒の変化は大きいと先生方からもご評価いただいています。

今年はインターンシップ自体を取りやめる学校もあり、学生にとって二度とない機会が無くなってしまうのはとてもやりきれない思いですが、弊社はいつでもインターンシップ、職業体験大歓迎ですので、お気軽にお声かけください！

法律施行を先取り「パワハラ」を学ぶ

秋の訪れを感じ始めた9月下旬、万全な感染予防対策のもと毎年恒例の全体研修を実施しました。今年は、①自分の仕事を紹介する「私の説明書」、②中小企業では2022年4月から施行される「改正労働施策総合推進法（通称：パワハラ防止法）」を先取りしたハラスメント研修、③CSRと強みワークショップという、構成で実施しました。

「私の説明書」では、各自がどんな仕事をしているのかを共有するとともに、自分自身の業務の棚卸をしました。弊社にはバリューチェーンという社内共通用語があり、業務内容を共有することでチェーンをさらに強くするための改善点が明確になり有意義な時間となりました。

ハラスメントについては一般社団法人日本産業カウンセラー協会から講師を招き、ハラスメントの基礎知識と対策の必要性に加え、コミュニケーションスキルのひとつである「アサーション」について学びました。

まだまだ勉強は足りませんが、より良い社会、会社になるためにも継続していきたいと思います。

いろいろ手作りしています

JO32号では弊社の新ブランドcocollabo（ココラボ）の手作りマスクを紹介しましたが、実はマスク以外にもいろいろ手作りしています。

まずは社員共用の「エコバッグ」。印刷用紙専用の包装紙、通称「ワンプ」をリユースして「脱プラ」に貢献です。紙を包んでいる包装紙だけあって内側がビニールコーティングされ、丈夫で水に強いのが特徴。コンビニ弁当にもぴったりサイズでとても使いやすいと好評です。

もうひとつは感染予防対策グッズの「飛沫シールド」。古くなったクリアファイルを半分に切って割箸を貼り付けたらあっという間に出来上がり！

皆さんの会社でもリユース&手作りで楽しくエコ活しませんか。

ブログもチェック！ https://kyoshin-blog.com/

JO（ジェイ・オー）2020年10月号（第33号）
発行者：株式会社協進印刷
横浜市神奈川区大口仲町108番地
TEL：045（431）6611
FAX：050（3730）6273
URL：http://www.kyoshin-print.co.jp

YOKOHAMA PREMIUM 地域貢献企業
CSR
GREEN PRINTING JFPI F-810042 本工場は、環境に配慮したGP認定工場です。
GOLD 環境保護印刷

協進印刷はクリエイターを応援しています！裏面のギャラリーで毎号作品を紹介。　今回は…ココロはずむアート展の作品です。